

思考に肺活量を！



加納 健 司

教育は国家百年の大計と言われているが、現代日本社会は教育の危機にあるように思う。教員の権威と自由度を奪った結果、予備校等が隆盛した。その過程で、学力は記憶量に置き換えられ、効率的学習法が蔓延し、(真の学力とでも言える教養の形成を無視した) 受験科目選択が横行し始めた。親は子を囲い込み、孤立教育を好んだ結果、希薄な人間関係となり、公共性の欠如した利己的競争心が際立つようになった。知の共同体としての大学での教育では、しばしば本質的疑問を投げかけ、単一の正解を否定することもあるが、一つの正解に向けて効率的に到達することを学んできた若者は、大学教育に戸惑い脱落しがちになる。学生は必要以上にプロトコルを求める傾向にあり、時には指示待ち作業員として振る舞うことすらある。基礎が欠落しているにもかかわらず先端研究にかかわっただけで、自身が成果を挙げたように錯覚する学生も生まれる。大学では、法人化以降、定員削減と運営交付金の大幅減額により、教員が外部資金獲得に奔走している。その結果、学生と議論する時間が極端に減少した。教員も成果主義になり、流行や効率重視の研究展開を好むようになった。こうした環境の中で育った若者が社会にどんどん出ていく。

現代教育を取り巻く現状からは、日本社会に生きる人々の創造性が生まれにくくなるのは当然の帰結であるようにも思われる。最近の新入社員に創造性を求めても何のコメントが返ってこないと企業人は嘆く。一方で、企業も政府も長期展望に立脚した方針よりも、短期成果主義の戦略を好むようになってきているのも事実ではなかろうか。

教育は、一元的なものではないし、効率で考えるべきものでもない。無駄とも思われるほど時間をかけて多面的な議論をすることが重要である。教える方も教えられる方も、時間を取り戻さねばならない。孤立教育から脱却して、裸の人間関係に立脚した集団教育を再建しなければならない。こうした教育問題は、当事者だけで対処できる課題ではない。そしてこれは今や社会問題でもあるが、ほとんど改革されていないどころかむしろ悪化しているようにすら思われる面がある。

しかし、産官学をつなぐべき学会という集団でこの問題を正面に捉えて活動することは可能ではないだろうか。本会も含めて、多くの学会は、これまでどちらかという研究成果の披露や先端研究に関する議論に焦点が置かれてきた。しかし学会活動と科研費配分との強い関係は薄れ、学会の求心力が低下しがちな今、研究というベクトルと一見直行するような教育というベクトルを持った集団としての学会活動を展開できないだろうか。知識伝達としての教育技術を議論するのではなく、日々、面白いことを考え、仲間に披露し、批評しあう集団。車の両輪のように実学と虚学が共に力強く動く集団。鎧や兜を脱ぎ棄てた人間同士が話し合うことの楽しさと感動を味わう集団。

分析化学は、はかることの重要性を強く意識した総合科学である。本会はこのようにした学問に関係するからこそ、上に述べた教育というベクトルを強く意識した集団を形成することは困難ではないと思う。サロンのような集合体形成から始めるのもいい。効率の尺度を捨てた遠回りの議論と人間関係にこそ、深い思考への重要なヒントがある！

先日、「最近の日本は、思考に肺活量が足らなくなってきた」と、あるラジオのDJの声が流れてきた。なんとも不可思議な言い回しであるが、何故か私の心を打った。本年9月に開催予定の第62年会での教育に関するシンポジウムが、本件について考えるきっかけになればと願っている。

(Kenji KANO, 京都大学大学院農学研究科, 日本分析化学会近畿支部長)